エドワード・エヴァレットの教育観

福　田　京　一

I　序

エマソン（Ralph W. Emerson）は1820年からの20年の間にアメリカの文化――文学，哲学，教会，国家，慣習――のなかにその前の時代とは異なった傾向が現れたと「ニューイングランドの生活と文芸に関する歴史的覚え書き」で述べている。その新しい傾向とは「国家は個人のために，そしてすべての人の保護と教育のために存在する」という考え方であり，それはさまざまの革命や国家的運動のなかに不十分ながら反映されており，とりわけ哲学者の思想の中に「個人が世界である」という表現で明確になっていると述べた。従って個人の社会的孤立は「本質的で，進歩的」なもので，その目標は「個人の拡大と独立」である。個人の社会からの孤立が社会的連帯感を却って強化するというエマソンの認識は，ちょうど1830年代の初めトックヴィル（Alexis de Tocqueville）がアメリカ社会の弱点を個人主義として指摘したことと正反対の認識であった。[1]

しかしアメリカの民主社会における個人の孤立が個人を先祖とも子孫ともまた同胞とも切り離すことになるというトックヴィルの警告を待たずとも，自由と独立と平等の理念が社会において作用するとき，個人の精神の内部においては他者からの自己の分離に伴う自我の危機が，また政治や経済や社会においては国家的社会的統合の解体の危機が迫ってくることを1820年代のハーヴァード出身のユニテリアン派で，ホイッグ的政治を支持する人たちは，急速に変貌しつつある社会を目の前にして，実感していた。[2] 1820年代の初めの頃のニューイングランドの文化的傾向を回想して，エマソンが彼自身も含めて当時のハーヴァード大学の学生に圧倒的な人気をもって崇拝されていた古典文学の教授エヴァレット（Edward Everett, 1795－1865）について，

> これはレトリックの勝利であった。それは彼が教えようとした知的な，あるいは道徳的な原理によるものではなかった。それは思想のせいではなかった。

と書いた。かつての師をこのように評価するに至った経緯を詮索するのが当面の目的ではない。エヴァレットを「完璧な単純性の文体をもって細々とした博識に戯れて悦に入っていた」[3] と断定したエマソンが理解しなかったエヴァレット，あるいは理解したくなかったエヴァレットは，その優雅な弁論術と微にいる博学のみによってハーヴァード大学やマサチューセッツのみならず合衆国の多くの人々に支持されたわけではなかった。エヴァレットにも評判の雄弁をもって語り続けた彼の信念があったし，それは1820年から約20年間のニューイングランドの知識人の一端を代弁するものであった。

1．エヴァレットは『アメリカの民主主義』の書評で，全体として著者の見解を高く評価した。彼はいくつか異を唱えたが，人民主権による普通選挙の弊害は「教育の普及によって除去できる」とコメントした。"De Tocquville's *Democracy in America*," *NAR*, 43 (July, 1836), 178-206.

2．Daniel W. Howe, *The Unitarian Conscience* (Cambridge, Mass., 1970), 224-26.

3．Ralph W. Emerson, *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson* (Boston, 1904), X, 330-335.
エマソンの「自己依存」の論理も，エヴァレットのユニオン観と同様に，この時期の産業道徳のひとつの表現として理解できるのである。Milton Cantor ed. *American Workingclass Culture* (Westport, Conn., 1979), 62 参照。

以下この小論において，Ⅱで簡単に彼の略歴を記してから，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴで1820年代から30年代末までのエヴァレットの講演に現れているアメリカ観を調べ，Ⅵ，Ⅶ，Ⅷ，Ⅸ，Ⅹでそれとの関係で明らかにされる彼の教育観について報告する。

Ⅱ　1839年までの経歴

牧師オリヴァーの第4子としてマサチューセッツのドーチェスターに1794年4月11日に生まれた。1811年ハーヴァード大学を首席で卒業して後，1814年神学で修士号を得た。見事な弁説の才によりユニテリアン派のブラトル・ストリート教会の牧師になったが，1年後ハーヴァードのギリシャ文学の教授職に招かれたので，その準備のためにドイツに留学（1815－19年），ゲッチンゲン大学より博士号を修得し，ヨーロッパ旅行の後，帰国。1819年よりハーヴァードで教鞭をとる。学究生活の傍ら『北米評論』の編集を1819年から1823年まで行った。1822年ボストンの有力な実業家の令嬢シャルロッテ・G・ブルックスと結婚し，1824年頃政界への転身を志し，翌年当選し5期11年議員を勤めた。1835年ホイッグ党とアンチ・メイスン党の支持を得て，マサチューセッツ州の知事に当選した。1836年から3年間の在任中の主な業績は，アメリカで最初の州教育委員会の設立――当時上院議員であったホーレス・マンがその教育長に任命されて12年間勤めた[4]――と師範学校制度の確立，そしてハドソン河に通じる鉄道建設に100万ドルの財政援助をする法案を通過させたことである。[5]

Ⅲ　ユニオンを支えるもの

1824年から1839年の間になされたエヴァレットのスピーチを調べてみると，個々の主題はひとつの基本的な思想的な枠組みのなかで論じられているのが分かる。[6] その枠組みは社会と知性と道徳の三つの次元からなり，アメリカのユニオン（Union）を支える基本的な構成要素となっている。[7]

先ず第1に，アメリカの社会の特質は自由の精神に基づく「自由な代表制政府（free representative government）」（*O*, 398）にある，と彼は見た。そしてユニオンの政治的社会的原理である自由の意義を紋切り型ともいえるほどの単調な論理で，しかし見事な能弁で聴衆に訴えた。それは独立革命戦争に参加した世代や建国期の指導者たちが亡くなり，彼らの偉業が若い人々の記憶から消え去ろうとする時期に入ったせいである。独立戦争そのものには参加しなかったが，その後の建国の過程を知っているエヴァレットのような世代のものから見れば，建国の父たちについて親近感をもって少年期から青年期を過ごさなかった世代が1820年代の激しい社会の変化にたいしてどのように対処するのか心配であった。そこで彼らの時代をアメリカの歴史の連続性のなかに位置づける視点を与えて，彼らに成すべき義務を知らしめ，それに向かって国民感情を一つにまとめようとしたのである。[8]

第2に，知性の次元では啓蒙主義の精神に則って，科学と技術と人文主義的教養（歴史と文

4．マンが任命された経緯については，H. W. Button and E. F. Provenzo, Jr., *History of Education and Culture* (Englewood Cliffs, NJ., 1983), 96-99 参照。エヴァレットとマンの思想上の類似点については，渡部晶『ホーレス・マン――教育思想の研究』（東京，1981），11－12，18－21参照。

5．エヴァレットの経歴は，*DAB* と Ronald F. Reid, *Edward Everett* (New York, 1990) に依る。

6．テキストとして，*Orations And Speeches On Various Occasions* (Boston, 1836) と *Practical Education On Useful Knowledge: A Selection From His Orations And Other Speeches* (New York, 1854) に所収の32篇のスピーチと Reid の上掲書に転載されている4篇のスピーチを使用。
　引用にはそれぞれ*O*, *P*, *R*と略し，その後ろにページを記す。

7．この三つが三位一体として表現されている用例として，*O*, 398; *P*, 558; *P*, 258; *P*, 281を参照。

8．次のスピーチを参照。1824年12月22日（プリマス），1825年4月19日（コンコード），1826年7月4日（ケンブリッジ），1826年8月1日（チャールズタウン），1828年7月4日（チャールズタウン），1830年6月28日（チャールズタウン），1832年1月16日（ワシントン），1833年5月28日（ボストン），1833年8月20日（ウスター），1834年9月6日（ボストン），1835年4月19日（レキシントン），1835年7月4日（ベヴァリ），1835年9月30日（サウス・ディアフィールド）。

学）を大多数の国民に教えることによって，無知と野蛮からすべての国民が脱却する機会を持てるようにすることである。教育の普及による知識と情報と技術の平等な共有によって，産業革命の進行にともなって同一の職種のなかで起こりかけている新たな階層の分化や，地域間の利害対立などを緩和することができると考えた。情報の普及は道路，運河，鉄道建設とともに，当時深刻な問題となりつつあった東部と西部・南部の地域間対立を解消する決め手となるとエヴァレットは考えた。

また大工場の出現と近代的な機械の発明はそれまで熟練職工の技術をある程度時代遅れのものにした。こうした変化は伝統的な親方・徒弟制度を揺がせ，それぞれに技術革新を迫った。商業においては，資本家と労働者の対立が深刻になり，それを蓄財の公共の福祉への還元という形で解決を計るために，若い商人にはリパブリカニズムの教育が必要であった。農業においては技術革新が最も遅れをとっていたので，伝統的な農作業を革新するために農業に関する科学的知識の基礎を教えることが大事だと考えた。このように知性の向上は1820－30年代の社会秩序の保全と社会全体の経済的繁栄に「特に緊急に求められた。」[9]

第3に，この時期に行われた多くの改革運動が示しているように，旧来の産業および生活の様式の変化によって生じた人々の不安感を受けとめて，彼らの生き方に確固としたモラルを与えて，変動の激しい社会に対処できるようにすることが必要であった。エヴァレットが推奨したのは理性的なキリスト教に基づく生活態度であり，なかでも強調された徳は勤勉（industry）と質素（frugality）である。

この二つの徳目は，古代ギリシャとローマの共和主義の徳でもあり，[10] またピューリタンの職業倫理でもあったが，共同の作業によって最も効率よく生産することを目指す産業革命期の労働者の生活に最もふさわしい徳目であった。時間と規則に厳格に従う「労働が生活の中心となった」時代を迎えて，[11] 労働の果実である繁栄はキリスト教の教えを守る「啓発された良心」の持ち主に約束されていると説いた。すべての働くアメリカ人は社会の構成員であるからには，その労働の場においてもその人にふさわしい居場所があり，そこで自らが選んだ仕事を知識と技能を使って遂行すれば文明社会における幸福を手にすることができるという。[12]

次にエヴァレットはこの三つの次元――社会，知性，道徳――におけるアメリカの伝統を指摘して，それを神聖化する。そうすることによってアメリカを単に文明史上もっとも進歩した国家と見なすだけではなく，アメリカが人類の救済史を完遂する使命を担っていると見る。従って，彼が共和国アメリカの「神聖な時」に「神聖な場所」でおこなったスピーチが聴衆に対するイデロギー教育そのものになっているのだが，この点は後述するとして，次に以上の三つの次元が互いに関連しあって支えているユニオンの土台となっている彼の共和主義思想をまとめてみよう。

Ⅳ　共和主義思想

エヴァレットはアメリカが古代ギリシャとローマの共和主義の精神を継承し，それを完成させたと考えた。「アメリカの国民性が知的向上

9．次のスピーチ参照。1826年8月26日（ケンブリッジ），1828年9月26日（チャールズタウン），1827年11月（ボストン）ほかでのスピーチ，1831年11月14日（ボストン），1833年5月21日（ボストン），1833年10月16日（ブライトン），1835年8月25日（アーモスト），1835年10月7日（ボストン），1837年9月20日（ボストン），1838年8月16日（ティズベリ），1838年9月13日（ボストン）。

10. Gordon S. Wood, *The Creation of the American Republic 1776-1787* (Chapel Hill, 1969), 52. 1776年頃の「リパブリカニズム」については，同書 pp. 46－90を参照。

11. 産業革命の文化的表現である産業道徳が労働者の生活，節酒，余暇，教育にどのように影響を与えたかを，リンの靴製造業者の生活を通して調べ，1826－60年頃の文化的不和の問題をファラーが指摘している。Paul Faler, "Cultural Aspects of the Industrial Revolution: Lynn, Massachusetts, Shoemakers and Industrial Morality, 1826-1860," Milton Cantor, *op. cit*, 121-48.

12. 次のスピーチを参照。1830年10月6日（チャールズタウン），1833年6月14日（セイラム），1837年8月16日（ウィリアムズ大学），1838年10月10日（タウントン）。

への努力の最も重要な源泉である」が，それはアメリカの政治体制に最も力強く発揮されていると言って，ギリシャ・ローマの政治体制と知的文化と比較した。古代ギリシャの自由は「ひとつの都市の壁の中の」自由であり，都市国家にのみ権力と自由は限定されていたので，周辺の従属国家は専制体制の下にあった。「ローマは国家として自由であったことはなく（中略），誇り高い市民も芸術愛好家の，教養ある，裕福な貴族の奴隷であった。そして厳格な護民官の支烈な戦い以外に自由の友をローマに関して思い出すことはない」（*O*, 12）。アジアとアフリカをも含めて古代から現代に至るまでの歴史を通じて「純粋に選挙による代表制政治の実例はわれわれの前には存在しない。」

古代ギリシャとローマがある程度の自由を確保して，公共の美徳と自由の精神と民衆の力を示す文化的遺産を後世に残したが，自由の精神を普及させる伝達手段と「代表制の原理」に基づく制度を欠いていたために，その精神を国民全体に浸透させられなかった。その結果，自由の精神を共有しない多くの国民は国家に対する自衛の力を使う術を知らず，そのために外国の独裁者か国内の裏切り者によって国家は崩壊した（*O*, 143－45）。

ギリシャとローマにはかなりの数の奴隷が存在したし，また文明の名にふさわしくない残虐な英雄たちがその歴史に現れたが，それに比べてアメリカの歴史のすべての頁には「ギリシャとローマの名声が由来するところの精神と特質の手本」が現れており，しかもアメリカの英雄たちは「良心と自由のために」（*O*, 69）戦ったのである。ギリシャはかつては「偉大な知的共和国」であった。それは事実だが，文明の３つの道具――自由な代表制政治と知識普及のための印刷術と純粋な宗教（キリスト教）――が欠如していたために崩壊した（*O*, 398）。

さてエヴァレットが語るアメリカ社会の民主的特徴は，

> すべての人が自由土地所有者や選挙の対象となるすべての役職を選ぶ有権者，またその候補者であるか，またはそうなれる可能性があるところ，そして良い教育手段をすべての人が利用できるところ，人為的社会的差異がほんの僅かしか存在しないところ（*O*, 87），

にある。しかし社会と政治の制度において成すべきことは多く残されており「革命化される必要がある」が，「大衆の利益と希望に完全に応じるように作られねばならない。」

この民主制政治の根拠は1775年４月19日にコンコードで始まったイギリスとの武力衝突に見られる。それは外国勢力に力を頼まないことにおいて「独立」を意味し，いかなる社会階層にも国民が保護を求めることを軽蔑することにおいて共和主義である。「独立宣言」の意味は単なる歴史的重要事件ではなく，政治学における最大の発見であり，「政治的完全性についてのすべての考え方を実践的に解決したもの」（*O*, 103）である。一方では法律を集大成したものであり，他方では政治制度の基礎となる。

政治組織と個人の関係についての前提は「個人の条件は組織に支配される。」では組織はどのように決められたのかと言えば，それは権力による方法，つまり最強者の権利が政府の唯一の基盤であった。古代国家も近代国家も，どれほど擬制的にその本質を隠蔽しようとも，アメリカを除いて例外はなかった。

ただし歴史上注意を払うに値する政治形態が二つある。一つはイギリスの二大政党――トーリーとホイッグ――による政党政治である。前者の政府の唯一の基盤は「神聖な権利」であり，それによって王と彼の助言者が国を治める。他方，後者の政府の基盤は「初めの契約（the original contract）」であり，それは現存の組織がその記録であり証文であるとする。アメリカ憲法制定までの歴史においてトーリーの政治思想が支配的であったが，ホイッグの思想は最もリベラルであった。しかしホイッグの場合でさえ，その契約を修正する権利は無かったのであるから，結局のところ最強者の権利が支配していることに変わりはない（*O*, 104－05）。

エヴァレットが注目したもう一つの政治形態は古代ギリシャの共和国で行われた全員参加による政治である。この実験的試みは，結局すべての国民の干渉を受けて国家を運営することが物理的に不可能になったために失敗した。また政府の目的は国民が仕事に励めるようにするのであるのに，政治への参加のために仕事ができなくなるという状態も失敗の原因であった。すなわち，「すべての国民が政府になることはできないので，誰かが代わって代行しなければならない」(*O*, 108)。

こうしてアメリカという「代表制共和国（a Representative Republic)」(*O*, 110) は完全な政治原理をもった国家として世界の模範となる資格を自ら認める。実際の行政は平等の原則による多数決の規則によって運営されるが，この原理は国民の社会的権利の拡大と幸福を増大し，そして戦争を抑止する作用をもつ。その証明はその原理による成果――産業の発達，人口増加，通信交通，科学，財産法，政治的平等，犯罪法，貧困の減少，教育の普及――によって判断できるという (*O*, 373－74)。

このようにエヴァレットは，根本において個よりも公を優先させる共和主義の原理と民意を代表する選ばれた人の指導による秩序の重要性を理解して，社会的進歩のために貢献できる国民の養成が緊急であると考えた。

V　アメリカの使命

アメリカ政治の原理と実践が世界の文明・非文明国に対して指標となったのは，アメリカが自由を獲得するために戦った聖戦の歴史を持っているからであった。その歴史を振り返って，エヴァレットは繰り返しアメリカが神の使命を担った地上における「選ばれた国」であると説いた。[13]

救済史に裏付けられているアメリカの歴史は，文明という脈絡では三つの段階の最先端に属する，という。第1段階は古代エジプトの文明の時期，第2段階はギリシャ・ローマの文明の時期，第3段階は15世紀末のコンパスや印刷術の発見によって象徴される科学技術の改革と宗教改革の時期である。アメリカは第3段階の「世界史上最も選ばれた時」(*O*, 50) に発見された。

> われわれは摂理によって実行すべしと任命された実験の尊い性格とそれが実践される劇場の崇高性によって新たなる精力と熱意を持つように招請されている。旧世界がもはやいかなる希望をも提供しなかったときに，この人類の最後の避難所を開拓することは神の悦びであった。計画は始まった。そして今外国の堕落から遠く離れて，最も広範囲に，最も恵みに満ちた展望のもとに進展しつつある。そして人間社会の大問題を解決し，しかも永久に，あの重要な問題――人間を信用して純粋に民主制度を任せられるのかどうか――に決着をつけることがわれわれに任されているのは確かなことだ。(*O*, 36)

彼はアメリカの政治社会制度の先進性が他の国々の政治的実践の模範になることを自慢しただけではない。先に挙げた3つの次元において先駆的立場にあることの根拠を，選ばれた国としてアメリカがキリストの救済史のなかに位置づけられていることに求めた。巡礼の始祖とピューリタンによる植民の事業，フレンチ＝インディアン戦争，そして独立戦争，その他自由と独立のための戦いに関係した事柄などの過去の政治的重大事件は歴史の完結に向ってアメリカが進んでいる証拠である。これらの聖戦に参加した指導者や無名の兵士は聖徒または殉教者として，その戦いの意義とともに毎年，それぞれの記念日にゆかりの場所で祝福されるべきだと述べた。[14]

13. 1812年以降アメリカのアイデンティティを定義するのに，ホイッグは「歴史」を，デモクラットは「原理」を規範にした事情については，D.W. Howe, *The Political Culture of the American Whigs* (Chicago, 1979), 69-95 参照。

14. 独立革命が神話化されて市民宗教となっていく過程の研究には，C. Albanese, *Sons of the Fathers* (Philadelphia, 1976) がある。ただしエヴァレットはニューイングランドの植民地時代の歴史も神話のなかに取り込んでいる点で，G. Bancroft のアメリカ史と同じモチーフをもっている。Fred Somkin, *Unquiet Eagle* (New York, 1967), 175-206 参照。

エヴァレットはさながら祭司のように，「自由の大義のために尊くかつ危険な役目を果たすようにと神によって呼び出された」(*O*, 97) 革命の指導者や戦士について，招かれた場所で儀式的な講演を行った。

> 今日われわれは平和と安全に恵まれ，公的にも私的にも最も豊かな祝福を頂きながら参集しましたのは，あの試練と恐怖で震える予感と昂ぶる堅い決意の夜――そして時の終りまでレキシントンの名をアメリカの自由人の心のなかで神聖なものとする血の朝――それがどのような光景であったのかを，感謝をこめて記憶のなかに招き入れるためです。(*O*, 489)

革命から50年以上が経過しようとするときに，忘却から殉教者を救いだし，彼らの「血の記憶は父から息子へと時の終りまであなたがた市民によって伝えられねばならない」(*O*, 490)。エヴァレットの講演の狙いは，大義に殉じた愛国者を思い出すことによって，公私にわたって恩恵を受けているものが利己心を捨てて「結合する (to unite)」(*O*. 225) ように促すことにある。

巡礼の始祖はイギリスの宗教的政治的専制からの解放をめざし，ピューリタンはイギリスの自治組織 (self-government) をアメリカに移植することに成功した。インディアンとの平和共存をはかった開拓者たちはキング・フィリップ戦争を戦い，多くの血を流したが勝利をおさめた。フレンチ＝インディアン戦争では植民地の人々は本国と団結して7年間の戦争に勝利した。このときのフランスの脅威からの解放闘争の教訓が，次のイギリスの専制からの独立をニューイングランドの人々に決意させた。そして独立後政治権力を連邦政府と州政府の間に調和的に分散させる制度を発明して，それによってユニオンを保持することに成功した。

> 歴史上，自由の旗が激しい嵐をついて戦場に誇らしくはためいた苛酷な戦いの事例はないこともない。しかし歴史上，高価な代償によって得られた宝を賢明に使用して，そして安全に次の世代に譲った国民の実例はない。世界の目はその実例を求めてわれわれの上に注がれている。シーザーを暗殺したブルータスについてある歴史家が次のように言っている。彼はフィリッピの激しい戦闘の後，苦しい声を上げながら自らの刃の上に身を投げ出して，自分は実態あるものとして徳を追いかけてきたが，それがただの名にしか過ぎないことに気がついた，と言った。今のこの瞬間にも，噂にきく自由がまやかし，嘘辞，呪いであるのか，それともそのためには破滅も断頭台も半月刀もものともしないことが必要な祝福であるのかを知るために，われわれの制度の実際的な作用を熱心に見つめている立派な人々が旧世界にいるのだと言っても過言ではない。(*O*, 162)

世界はアメリカの自由の原理がいかに政治社会において機能し，実際的な成果を生むのかを注目している。エヴァレットはアメリカが「文明の種子を」世界中に蒔く「名誉ある指導的立場をとる」(*O*, 320) ことを神によって命じられたと考えた。そして「もしわれわれが失敗すれば，もしわれわれが失敗すれば」(*O*, 161) と，聴衆に向かって熱っぽく訴えた。

それを聴衆に訴えるエヴァレットのレトリックはいつも定まっていた。堕落したヨーロッパ対選ばれた国アメリカという対照的修辞法である。アメリカの世界史における神聖な使命を前提にして，この論法がすべての主題に使用されて，結局のところアメリカ人の共通の敵は何で，誰であったのかというように収斂されてアメリカの過去の歴史が再構成されるのである。その際，過去の過ちはその時，その場の歴史的状況において理解されるべきだと主張した。

彼が「われわれの父」の「誤り (errors; faults, *O*, 617)」として弁護したのはピューリタンの「不寛容」とインディアンへの残虐行為である。ピューリタンは自ら求めた宗教的自由を植民地内の分離派にたいしては認めず，彼らを迫害したその不寛容な態度は「すべての教会を一体に

結合させる教会制度の下で教育をうけ,」「教会が国家の一部である政治制度の下で教育をうけた」ので誰もそれを非難することはできない。「われわれの父を唯一の公正な試験，つまり彼らが生きた時代の基準によって判断しなさい」(*O*, 224)。そうすれば，彼らの殉教の歴史が「独立革命と憲法制定に指導的な役割りを果たした人々の知恵と不屈の精神」の土台となったのが分かる（*O*, 228)，と言う。

インディアンに対してはやや迂回した論理を使ってアメリカ人（入植者）の正当性を弁護した。友好的であったマサソイト（Massassoit）の死後（1660年)，息子フィリップの指揮により団結したインディアンとの戦争によって，彼らの土地を奪い，彼らを殺戮したと非難されてきた「われわれの父」たちへの「根拠の曖昧な批判」を払拭するために，入植から戦争終結に至る経過をたどり，父たちの子孫である現在のアメリカ人が誇りをもって彼らのことを思い出せるように，戦場であった「血の小川（Bloody Brook)」で清めの儀式としてスピーチをおこなった。父たちはインディアンに適正価格の土地代を支払い，文明生活の技術を教え，キリスト教の福音を伝えた。しかしフィリップは白人へのジェラシーから戦いを始めた。結局インディアンは「摂理の偉大な計画が理解できず」(*O*, 610) 白人を上回る残酷な襲撃と殺戮をおこなったあと敗れた。それは野蛮人にたいする「自由と真実の使者としてのわれわれの父の大義」の証明であった。

エヴァレットは戦争時の双方の被害，死者数などのデータを挙げて，そして途中で詩と彼の創作によるエピソードを挿入して――白人の「紙の権利（paper rights)」によって先祖伝来の土地から追われていくのに義憤を感じて戦ったインディアンの心情をフィリップの独白という形で劇的に表現してみせた（*O*, 612－13)――歴史を再現した。彼は歴史を基本的には客観的な事実としたうえで，それを物語化した。彼が講演で取り上げたアメリカの歴史的事件についてすべての聴衆は良く知ってはいるが，それは「けっして退屈にさせることもなく，古臭くなることもない」と言い，むしろ神が「まったく新しいことを付け加えること」を禁じているその「物語（tale）を父から息子へと繰り返されるようにしよう」(*O*, 492) と言った。

こうしてエヴァレットは父たちの歴史を作り，それによって現在のアメリカを観察する観点を提出したのである。

> 皆さん，これは言い尽くされた主題だと考えないでおきましょう。彼の手になる業が――彼の業績の記念碑が――そして彼の助言の果実が残っている間は，それは決して言い尽くされたことにはならないのです。それどころか，それはすべての時代が，新しい光をあてて，研究する主題であり，アメリカの運命のみならず，自由という普遍的な大義に永続的に関係する主題なのです。(*O*, 535)

これはユニオンの象徴としてエヴァレットが何十回となく取り上げたジョージ・ワシントンについて言及したものであるが，自由と独立に関係したアメリカ史のすべての事件と人物にあてはまる。事実は一つであるが，それに「新しい光をあて」るという意味は，それぞれの時代の問題を解く鍵がそこに隠されているという意味であろう。

そうだとすれば，エヴァレットが彼の時代の最大の問題と考えていたのはユニオンの問題だということになる。建国の祖父たちの顕現によってポスト・ミレニアムに入ったアメリカがその世界的使命を果たすことができるのは，アメリカがユニオンを堅持しているという事実を示すことによってのみである。[15] アメリカの歴史は――政治的宗教的抑圧，不毛の土地，病い，インディアン，フランス，イギリスなどそれぞれの時代によって異なるが――「共通の敵」(*O*, 361) にたいして団結して，自由という共和主義の理念を守るための戦いの歴史であった。自

15. 独立革命後の政治とミレニアム思想の関係については，James F. Maclear, "The Republic and the Millennium," *Religion in American History*, ed. John M. Mulder, et al. (Englewood Cliff, NJ., 1978), 187-89 参照。

由を求める人の共通の敵は何か。それがユニオンを堅持させると同時に，ユニオン（団結）なくしては勝ちとれないものであると考えた。

エヴァレットがいう敵は，1820年代に現れてくる党派間の争い，地域間対立，階級間対立，階層内対立，知性と技術の分離をはじめとする社会変化に伴う分離・分裂への兆しであった。イギリスからの分離は自由を求める過程で起こった必然であったが，自由の原理に基づくユニオンを分離に導くものは共通の敵である，というのが彼のスピーチに一貫している思想である。

ジェファソンとアダムズが7月4日に亡くなったという偶然は，「われわれの政治制度の完全性の最も喜ばしい実例」（*O*, 137）であると説く理由は，この二人が10年の敵対関係を忘れて，共通の敵イギリスに対してアメリカの南部と北部を代表して，その後20年間協力した事実によって，「党派性（the spirit of party）が民主制政府の最大の敵である」と告別の演説で言ったワシントンの教訓（*O*, 137; 534）が見事に生きているからであった。こうして共通の敵（党派性の問題）を解決するために共通の父（原理の実践者）を持ち出したが，同じ論法が他の問題についても使われたのである。[16]

Ⅵ　教育の意味

教育は，ユニオンを支える三つの次元――社会，知性，道徳――のなかで直接知性に係わるものであるが，それが政治的社会的自由を確保する上でも，また国民の道徳を高める上でも重要な役割を果たすので，最も重要なこととエヴァレットは考えた。

私的，公的手段の区別に関係なく，教育によって得られる知識が専制主義と無政府主義から社会を救い，「生命と個人の自由と財産に対する法的保証」を確保する「自由」の理念を実体化する（*O*, 558）。アメリカ以外の国では，為政者は国民を無知の状態において，軍事力を背景に独裁的政治を行ってきた。知識は一部の支配階級に独占され，「何百万もの人々は無知で，従って自らの権利に気づいていない」（*O*, 562）。さらに無知な大衆は「魂をもった存在ではなく，大部分はただの肉体にしか過ぎない」（*O*, 563）。

これに比べて，専制主義から解放されたアメリカの国民は，知識を共有することによって，自らが同等の権利と義務をもつ共和国の市民になる。

> かつて支配の道具であった学問が革命の道具になりました。教育を受けた一部の階級の形成ではなく，教育をうけた人々の社会の形成にむかってかなり進歩をとげた時代にわれわれが生きていることは光栄なことです。少数者にのみ時代の恐怖と弱点を克服する手段を与えた知的文化が，今や崇高な普遍的知的平等の媒体となり，そして人知の限りにおいては，人間の大きな関心事となりました。（中略）一口で言えば，教育とは，現在の世界において大多数の人間が委嘱されている義務を果たすために必要な準備なのです。（*O*, 382）

知識の偏在は独裁主義を支えるのに対して，知識の普及は民主社会を形成する。「啓発された自由（an enlightened liberty）」（*O*, 193）が「法律によって守られる自由」（*O*, 454）な社会を形成し，国民は「啓発された愛国心（an enlightened patriotism）」（*O*, 203）により，連帯する。このように啓蒙主義の思想はアメリカの教育思想のなかにその影響を最も色濃く与えている。[17]

しかし民主社会における知的文化の質についての懐疑的意見はプラトンの昔からしばしば聞かれたが，エヴァレットは二つの批判に対して反論した。一つは民主社会で生じる「放蕩と人民の権利の濫用の恐ろしい実例」を古代の未熟

16. D・ウェブスターのスピーチ（1851年7月4日）も，ジェファソンとアダムズの和解をユニオンの象徴として理解している。その他 Bancroft, Jedidiah Morse, Joel Barlow などによる7月4日と「独立宣言書」と「憲法」と指導者の聖化については，C. Albanese. 190－225を参照。

17. 建国期の教育思想と教育の実態に関する概略は，Carl F. Kaestle, *Pillars of the Republic* (New York, 1983), 3-12 参照。

な共和国から引っ張りだして，「完全に民主的な制度の特質についての乱暴な非難があった」(*O*, 14)。特に政治的権利を平等にすべての人々の間に広める結果，若者に政治的野心を煽り，地道な努力を忘れさせ，深い文化的教養とは相容れない国民的性格を形成するという非難が起こっていた。それに対してエヴァレットは答えた。

むしろ政治がすべての人に開かれれば，参加する人々の間に競争の原理が働き，能力や勤勉や野心に劣る人はそれらに優る人に道を譲る。競争を認めない世襲制度の下では悪はいつまでも悪であり続けるが，競争の原理のもとでは「問題の悪も自浄作用のある悪（a self-correcting evil）である」(*O*, 16)。従って，民主制度の下にある組織は流動的で，人々は相互に接触して国家の親密な知性に共鳴しあうので，知的向上に最もふさわしい。もう一つの非難は，古代ギリシャをはじめヨーロッパには文学・芸術の被護者としてパトロンが存在したが，アメリカには文化を奨励した王や貴族やメディチ家のような被護者が存在しないので，知的向上には不利な状態にある，というものである。これに対してエヴァレットは，ホーマーからヴァージル，ダンテ，マキャベリ，シェイクスピア，ガリレオ，バークなどを例に挙げて，彼らがパトロンによってその才能が発揮されたのではないと説明した。ヨーロッパの「私的なパトロン（private patronage）」に対して「公平な機会というパトロン」(*O*, 17) がアメリカにはあり，それは「より多くの精神を平等の条件で活動させる政治制度」の下で，民主的な諸制度――公立学校，公共図書館，博物館などの公共施設をはじめ講演会，新聞，雑誌などの安価な知識普及の手段――という形をとって人々の知的向上のために援助する。

このような制度の下で少なくとも特性ある文学が生まれる可能性は充分にある (*O*, 19) と言った。ギリシャのデモステネス（Demosthenes）や，ローマのタリー（Tully）によって，そしてその後ミルトンによって代弁された自由な精神がアメリカで実践されている一方，知識が進歩し普及するとともに「神聖な詩」が創造されてきたのであるから，一層進歩した良い知的環境にあるアメリカでミルトンを凌ぐ「偉大なキリスト教的叙事詩」(*P*, 268) が創造されるだろうという。[18]

このように，巡礼の始祖以来，農具と武器を両手にもって困難なイエルサレム建設の事業を遂行してきたが，ウイリアムズ大学の創立者の百年前の予言（エヴァレットの創作であろうが）

> 学校と教会が荒野に建ち，学問のための制度が興り，今は荒れて寂しい所ではあるがそこに図書館や標本室が造られその宝物をひろげ，天文観測台からは天空に向かってその胴鏡を突きだすことになろう。(*P*, 278)

が，知的選良のみならずジャクソン時代の民衆の間でいま実現されようとしているのだと考えた。

Ⅶ　産業と教育

「国内のユニオンという原理に次いで，」「ヨーロッパからの分離」がアメリカの繁栄の基礎となる (*O*, 48)。そしてヨーロッパより繁栄することがアメリカの政治原理の優位性を証明する。

> 現状を広く見渡すと大いに満足のいくものです。われわれは，多様な生得の才能や国内の数々の地域的利益によって与えられる相互利益に依存しあっているという新たな絆を創造するまでになっています。進歩は永続的で，確実なものになりそうです。なぜならそれは自然の秩序のなかで，そし

18. その根拠にエヴァレットはキケロとロンギナスと「スペクテイター，No. 633」を挙げている (*O*, 268)。主旨は，啓示によって思想の領域が拡大するに従って知性は宇宙の神秘の研究に向かう。このような知性は人間の理解力を超えた力を獲得し，神への理解に近づく。そして「人が天上から人事の事柄を処理するために降りてくるとき，彼は以前より昂揚した壮大な作法で考え，書くことになろう。」（キケロ，『雄弁家，34』）共和国の芸術としての「雄弁術」を革命期の啓蒙主義者たちは受け継いでいたが，エヴァレットも政治家，哲学者，雄弁家でもあったキケロの弟子として自認していた。

て法的な干渉をほとんど受けずに，大部分もたらされたからです。この数年間になんという幸福な変化が起こったのでしょうか！われわれの勤勉な階層が身につけている本当の衣服は，アメリカの国土から生まれた材料がアメリカの織機によって織られてできたものであります。(*O*, 48－49)

1815年マサチューセッツのウォルサムにローエル工場が設立されてから粗綿布の大量生産を行う近代的大工場が増え続けた。1816年の保護関税により農産物の輸出に依存していた南部・西部と東部の産業資本との間に激しい利害の対立が続いていたが，1824年ヘンリー・クレイの「アメリカ体制論」で，保護関税の収入を国内開発事業（道路，運河，鉄道）に充てて，東部の工業と南，西部の農業を結びつけ，相互の交流の発展を計ろうとした。また1823年には「モンロー宣言」によってヨーロッパの干渉を排して，国内の地域的階級的対立を緩和し，北米大陸での領土拡大の方針を決定づけた。このような内外の経済情勢の変化に対応するナショナル・リパブリカン（後のホイッグ）の政策をエヴァレットは支持した。

彼は国内のユニオンの確保を第1の，ヨーロッパからの分離を第2の原理として，対立の要因を内在している産業界の地域的階級的多様性を経済的発展の活力に転化するために文化的統合のヴィジョンを国民に提供した。ここに彼の産業教育の要諦がある。

エヴァレットの論法はアメリカの工業，商業，農業とヨーロッパのそれらとの相違を強調して，アメリカの優秀性を説くことと，国内の産業界の対立を「多様のなかの統一」という論理によって解消して，協調的感情を国民の心のなかに引き起こすことであった。

工業については，フランスの印刷職工の反乱の例を挙げて，その原因は排他的な徒弟制度にあるとし，またイギリスの職工は出生地から離れられない制度に縛られており，また団結も禁じられ裕福な貴族に拘束されているという。ドイツの徒弟制度では，親方の数が決まっており，親方が死亡か引退する以外は職人が親方に昇進できない。また職人は徒弟時代の後3年間修業の旅にでる規則があり，労多くして益がない(*O*, 243)。これに対してアメリカの職工は自由な政治社会制度の下で個人の熱意と企業精神が尊ばれ，自分が属する組織の統治者を選ぶことができる。さらに労働市場は自由で活発で，機会に恵まれている。安価な土地（1エーカー1.25ドル），航海法（保護関税）による好景気，ホイットニーによる綿繰り機の発明や交通の発達などによるアメリカの繁栄が，ヨーロッパの保護貿易政策による経済の沈滞と対比される(*O*, 245－47)。

こうした経済的状況を踏まえて，さらに一層「共和国全体に創造力と活力の拡充を計るために様々の教育施設を求める声，あらゆる種類の知的サーヴィスへの要望，あらゆる種類の専門職への援助の必要が生じるだろう」(*O*, 249)。この論法は商人に対しても，農民に対しても使われた。

「商業図書館協会」でのスピーチ（1838年9月13日）の目的は，商業，特に資本および資本家にたいする世間に流布している誤解を解くために蓄財，財産，資本，信用取り引きについて「正しい判断が大切であると考え，若い商人の理解の手助けをする」(*P*, 307) ことであった。アメリカでの富や利益は個人の「勤勉と質素な生活」の結果であり，ヨーロッパの世襲制による財産とは異なる。そしてアメリカでは「個人が利益を受けると，社会も利益を得る。」その理由は有能な人の活動が産業界全体を活気づかせ，彼の蓄財は寄付行為を通じて公共施設建設のために還元されるからである。このようなアメリカの商人は「公共の利益に奉仕する人(public benefactors)」(*P*, 328) である。このエヴァレットの見方は，具体的には――その時彼が話しながら見ている――商業の中心地として周囲の町村を資本と企業と交通によって結びつけているボストンの光景によって裏付けられていると見なす。

こうして私たちが話をしている間も，生

活と実業の声が無限の西部に向かって響き渡り，そしてすべての企業が，他の同じ血筋の企業と結合して，ひとつの調和と繁栄に満ちる全体を形成しているのです。その全体のなかで町や村が，農業と工業が，労働と資本が，技術と自然が――ひとつの壮大な体系に創りあげられ，凝縮されているのですが――絶えず自由で広範囲におよぶ商業の有する経済的社会的道徳的恩恵を集め，拡散し，また集中し，放出しているのです。(*P*, 331)

アメリカの農民も，王，貴族，大地主などによる土地の独占に苦しんでいるヨーロッパの農民に比べられた。アメリカの農民は，アブラハムやヨブの時代と古代ギリシャ・ローマ時代に農民が占めていた高い社会的地位を，農民が隷属状態に置かれてきたヨーロッパの中世・近世を飛び超えて継承しているのだと説いた。エヴァレットはジェファソンのように農民を「選ばれた人」とは見なさなかったが，歴史上アメリカの農民を特別の意義をもつアメリカ人のなかに位置づけた。その理由は，アメリカの自営農民は，家族や将来のことを考えて自分の土地を耕作するので土地を酷使しないこと，多くの小規模農場の存在が土地所有から生じる権力の分散に適合すること，神の土地の一部にあづかっているという意識と土地を介して生まれる祖先と子孫との連帯感により道徳面で良い影響を受けることにある，と説いた（*O*, 424－26)。そして独立革命を戦った兵士や将校の多くが農民であったのは彼らが独立自営の農民であったことと密接な関係があった。彼らは自分の土地のために戦ったのであるから，「そのような人々を征服しようとした企ては妄想であった」(*O*, 427)。

ただし農業の占める重要性にふさわしい改善の手段と情報を得る制度は，他の職種に比べて全く遅れていた。近年マサチューセッツ農業協会の蓄牛品評会の開催などによってかなり改善されたが，この方面で進展がなお必要であると，考えていた（*O*, 413)。

Ⅷ 「知性」教育

アメリカの教育はユニオンを支えると同時にユニオンによって教育の普及が理念的にも制度的にも可能になると言うのがエヴァレットの考えの基本である。教育はユニオンを，前述の通り，三つの次元――自由，知性，道徳――において強化し，進展させる。すなわち教育によって得られる知識によって人々は独裁主義とアナキズムから社会を救うことができるし，知性(教養，特に文学と科学）を促進する環境を創ることによって知性そのものを発展させ，私的公的繁栄をもたらし，そして道徳に良い影響を与える（*O*, 558－83)。また一方ユニオンの精神は――それは，エヴァレットによれば，ニューイングランドの植民地時代よりアメリカの国民性の一部であったということだが――公教育制度の普及というかたちによって教育を支えてきた。

エヴァレットはハーヴァードをはじめ，イエール，アーモスト，ウィリアムズ大学などに招かれてスピーチをするとき，私財の寄付によって設立されたそれらの大学がアメリカの公共の精神の手本であることを力説した。そして教育とユニオンの密接な関係を基にする教育論や教育制度についての見解を述べた。1833年イエール大学でのスピーチでアメリカのユニオンの状態は「国の内外において進歩の領域を拡大するために考えられる限り最も効果的な組織」(*O*, 410）であると述べてから，次のように続けた。

この組織の中心的原理は，構成員の結合(union）です。これによって彼らは立派な地方行政府の重い負担から逃れられ，境界線をめぐる永遠の争いによる近隣諸州の非難からも逃れられるのです。この原理によって，彼らはすべての精力を平和と平穏のうちに私的生活の技術の研修と公共の便宜と善意と向上にかかわる立派なすべての仕事の追求に専念できるのです。ユニオンの原理を攻撃することは我が国全体とすべての部分の繁栄を攻撃することです。それは

> 国家活動の拡大を阻止し，公的私的利益のために現在考えられるすべての方法を駆使して利用されている資源と活力を相互に傷つけ，破壊するための新しい手段に換えてしまうことです。(*O*, 410)

ユニオンの精神とその具体化であるアメリカの政治は「私的生活の技術の研修」と「公共の便宜と善意と向上に係わる立派なすべての仕事の追求」のために教育制度を援助し，拡充しなければならない。

では彼はどのような教育を考えていたのだろうか。彼によれば，教育の役割は二つある。一つは「最高の知的水準に達する知性の修業と訓練」であり，もう一つは「社会全体への有用知識の普及 (the diffusion of useful knowledge)」である (*P*, 255)。まずは前者から調べてみよう。

前者の教育には従来の方法より優れた方法はあるのかと問い，それには，良い影響の下にすべての人がおかれたら知性の発達は可能だと答える。ホーマー以来の天才的知性の持ち主は教育環境が悪かったにも拘らず，才能を充分発揮したことをもって教育手段，方法の改善や普及は無意味であるとする意見を退けて，一流の人物は平均的な人間の基準にはならないと断ったうえで，彼らももっと良い影響の下で育ったら欠点も少なくなっていて，より優れた人となったのではないかと，言った。そして現在のアメリカで「活動中の社会的，知的，宗教的影響力の共同作用」(*P*, 258) によって将来知性の「完全な発達と最高度の開発にふさわしい状態のもとで，いままでに現れたいずれの知性にも劣らない素晴らしい知性の持ち主が現れるだろう」(*P*, 259) と言った。

では良い環境のなかで是正される過去の知的天才の「欠点」とは何か。それは未発達な段階にある科学と異教の影響のことである。エヴァレットはホーマーからヴァージル，スペンサー，シェイクスピア，ミルトンなど古代から近代にいたるまでの偉大な詩人の作品に見られる宇宙観は現代の天文学からみれば「科学的誤謬」に基づいている。彼らの作品は今でも「詩的で快い」けれども，「主題のもつ厳粛性にふさわしくないように見える。」なぜなら「知識が拡大するにつれて，すべてのイメジャリーの範囲は拡大され，」「想像力と思想の領域は無限に拡大される」(*P*, 260−01)。「現代天文学の崇高な発見」は単なる詩的イメジャリーの問題ではない。

> このただ一つの科学研究によってだけでも，思想とスピーチと文学が素晴らしく高められるだろうと考えざるを得ません。(中略) 神の叡知と力，無限の空間，途方もない重量と力，そして宇宙の崇高性と調和について形成される諸観念は思想の最高の素材であり，詩的想念の最も多産な源泉であります。こういう理由で，目にみえる天体の領域が拡大され，天文学が発展するのに比例して，想像と思想の領土が無限に拡大されるのです。魂は偉大な対象について常に思索をめぐらせることによって偉大になるのです。(*P*, 261)

将来無限の宇宙の神秘が科学的に解明されれば，「哲学，詩，芸術，雄弁，音楽は新しい声で語り出すだろう。」過去の偉大な知性の半分は「異教の暗闇と不完全な文明の状態にあった。」そして知識の普及とともに，ホーマー——彼の詩には「純粋な精神的光明は皆無です」(*P*, 264)——からヴァージル，ダンテ，ミルトンへと詩は「純粋に」なってきた。このようにエヴァレットは知性の二つの要素である文学的教養と科学の関係を捉え，そして知性の向上に教育的環境の整備が極めて大きな影響があると説いた。

しかしここで注意すべきことは，知性の向上は究極的には知的天才によって達成されるという前提と，他方では能力はすべての人のなかに生まれながら備わっているという前提の関係である。この点ではジェファソンにとって自明であった能力差の問題が曖昧になっている。エヴァレットはその辺の境界線について次のように言っている。

> 立派で優れた業績を生み出す知性には高い教養は必要としないが，ある程度の教養

は必要で，それなしでは知性は育ちも，活動もできません。一旦知性が眠りから起こされ，それ自身の力を意識して鼓舞されれば，そして書物や生き生きとした会話などによる類似の知性との交流によって元気づけられれば，知性はそれ以上の援助を外から得ることを軽蔑することはありませんが，それを必要としなくなるものです。(中略)しかし何らかの方法で真実の一部が類似の知性を持つ人から与えられなければならないことは，殆ど避けられない事実です。もしこのことが完全に無視されれば，まっとうに開発されればニュートンとともに木星の軌道の境界域まで舞い上がったかもしれない知性は，それ自身の能力にも気づかず，またその気高い運命をまっとうすることもできずに単なる肉体の生命の欲求と欠陥に縛られるのです。(*O*, 262－63)

このスピーチは1827年ボストンの職工学校で行われたもので，技術習得を志す青年を対象にした啓蒙的な講演である。「ある程度の教養」の触発で，ニュートンと肩を並べられる程度の科学上の発見が可能だと示唆する一方で，そうでなければ肉体的欲求に束縛される生活しかないという。ここには「知性」に対する極端な区別――天才か凡才――しかない。このような区別によってエヴァレットはニューイングランドの知識人の一般大衆に対するカリスマ性を確保する一方，両者の分裂を繋ぎ留めるものとして「ある程度の教養」を大衆に求めたが，それが「有用知識」なのである。

Ⅸ 「有用知識」教育

もう一つの教育の役割である「有用知識の普及」は革命期の啓蒙主義者が抱いていた理性と実践の協調に対する堅い信念の表明であったが，[19] エヴァレットの時代にはその具体化をめぐってさまざまな試みが行われた。

われわれの社会の何十万もの人間のなかで有用知識において大いに進歩できないものはおりません。最も気高い発見に必要な才能に恵まれた人の数を言い当てたり，制限できるなどと思い上がる人はおりません。すべての人は生まれながらニュートンやフランクリンやフルトンと同じ感覚と能力をすべて持っています――高度に，とは申せませんが，しかしまったく無い，と誰が申せましょうか。(*O*, 263)

主旨は，大衆は天才になれなくても，有用知識を理解することは教育によって可能だ，ということである。

この知識は「有用科学」のことで，「生活の技術」を改善，向上させることができる種類の科学原理の基礎――具体的には，天文学，化学，地理学，物理学，植物学，鉱物学，農学，医学，政治経済学など――を意味する。[20] 知性は「共通の能力」と「共通の感覚」を備えた肉体のなかに閉じ込められているが，「適切な開発」によって，自然，社会，政治上の高度な真実を発見できうる知的存在になれる (*O*, 262)。「生まれたままの能力」のみに依存している未開人――その例としてエヴァレットはいつもアメリカ・インディアンを持ち出すが――と違って文

19. ピーター・ゲイ「アメリカ啓蒙主義」，『アメリカ史の新観点』上巻，(東京，1976)，61。

20. フランクリンの「アメリカ哲学協会」設立の主旨は「物質を征服する人間の力を強化し，生活の便宜または楽しみを増進する」ことにあり，研究と実験の対象は役立つものすべてであると言っている。(「アメリカにおける英国植民地に有用知識を促進するための提案 (1743年)」) またジェファソンの教育改革案によれば，初等教育では「読み，書き，算術」は勿論，「歴史」による「有用な事実」の教育，グラマー・スクールでは将来の知的活動の手段として「最も有用な」古典語と近代語の習得，さらにユニヴァーシティでは「有用科学」を教授することを主眼にしている。(「ヴァージニア州覚え書き，質問14 (1781－85)」)

この「有用知識」を重視する啓蒙主義の教育観は1820年代になれば，それまで一部の「巨匠や独創的な人」や選ばれた優秀者にのみ限られていた「有用科学」を一般大衆に広める情勢になってきた。たとえば1826年にマサチューセッツ州議会に提出された「装飾用の教育ではなく，有用で利益のある (成人) 教育」の試案 (*American Journal of Education*, I (1826), 86-96) を参照。

明人は技術と道具を高度に発達させて欠乏を補う力を創造してきた。文明とは「技術（useful arts of life）の総和と応用の別名」（*O*, 284）であるという。

このようにエヴァレットは「ある程度の教養」として，技術に応用できる実用的な知識としての科学の意義を，古代ギリシャ時代からの科学の進歩の歴史を解説しながら，大衆に教え続けた。彼が公教育において「有用科学」を重視したのはそれが繁栄に直結するからである。この知識は啓蒙主義の唯物主義的な実用科学の子孫であるが，彼が特にその意義を強調したのは，工業化における技術革新の時代を迎えて，従来の生活の実用的技術を慣習的に踏襲しているだけでは外国との経済競争に打ち勝てないし，また国内の地域間格差を拡大することにもなり，さらには階層内分化を促進して，さまざまな形で矛盾が出てきて，進歩よりも停滞が生じることを恐れたからである。ニューイングランドの中流の知識人の立場から言えば，知識（人）と労働（者）の分裂の危険を，後者に知識を与える教育によって回避することが必要であった。後者の立場からは，産業構造の変化から生まれる不安にたいして時代に対応できる技術を習得するためには新しい発想が必要だったということである。そして両者が結びつく接点が「科学知識と技術の結合（union）」（*O*, 233）である「有用知識」なのであった。[21]

1830年10月6日チャールズタウン・ライシーアムでの「労働者党」についてのスピーチで，彼は階級としての労働者が独自のユニオンを結成するのではなく，「他のすべての職種との間の密接で，親密なユニオン」のなかに属するべきだといった。その論法は，人間は労働によって食料を手に入れ，それによって自然の欲求を充たすように神に創造された存在である（*O*, 265）。しかし文明が進歩すればするほど，労働は減少するのではなく，「文明化された欲求（civilized wants）」（*O*, 267）が現れて，それを充たすための労働が生じる。文明は新しい労働を際限無く作り出していくが，これが文明生活の進歩というものだ。従って「労働者党」の一般的目標は，特定の選挙や候補者の問題に関することではなく，「労働者の繁栄と福祉を増進させること」にあり，具体的には，職業選択の自由を確保すること，そのための援助，労働による果実を保証すること，「労働」を創り出すこと，「幸福」を生み出すことである（*O*, 270）。

「労働者党」は階級としての労働者のものではなく，労働はすべての文明人の仕事であるので，すべての人の党だという。「最も完全な社会は最も多様な方法で最大多数の人々が職業に就いて，繁栄している社会である」（*O*, 273）と明快に言ってのけた。その社会では階級ではなく分業が，対立ではなく相互援助が，分離ではなく結合が目標となる。

さらに知識（人）と労働（者）の結びつきが必然であることを説く論法は肉体と精神の旧来の二元論である。「ひとつの調和した社会におけるさまざまな種類の労働者のユニオンは人間の構造と組織のなかに置かれているように思えます」（*O*, 273）。「肉体労働者でさえ身体のなかに魂を持ち，」フランクリンやニュートンやシェイクスピアと同じ能力を与えられているのだから，「すべての行為には肉体と知性の両方の作用が必要である」（*O*, 274）。知性と労力がどの割合で必要とされるかは仕事の性質により異なるだけで，いずれにしろ「両方が結合した作用」（*O*, 267）なしには行為は始まらない。

このようにエヴァレットは，第1に労働を神による人間への命令として，第2に労働を文明の所産とみなし，第3に労働が知性と協力関係にある根拠を人間性のなかに見た。このユニオン論は当時のニューイングランドの産業資本家が考える理想的な経済的繁栄の条件であり，それがそのまま啓蒙主義と共和主義思想とユニテリアン主義の洗礼を受けた知識人の文明観に適合するものであり，それをライシーアムなどで

21. 現実には労働者の階層内分化――特にアメリカ生まれの技能労働者と移民の肉体労働者の区別――が明確に存在していたが（Milton Cantor, 9-12），エヴァレットは後者に対する教育上の提言はしていない。ライシーアムや職工学校は上昇志向の青年向きの教養と技術講座が中心であって，肉体労働者のためのものではなかった。

の講演を通して大衆に説いて，受け入れられることをもって自己の存在証明にしようとしたのである。[22] そして少なくともニューイングランドの職工や商人や農民は知識の「効用と利益」を期待して，その言説に耳を傾けたのである。

X　道徳による浄化

政治が堕落と腐敗に陥り易いことをよく知っていた建国の父たちやまた共和国の教育の在り方に積極的な発言をしたベンジャミン・ラッシュ（Benjamin Rush）やノア・ウェブスター（Noah Webster）などは，国家の指導者を選ぶ資格のある選挙人の道徳をいかに高めるかが国家の将来を決定するとまで考えた。[23] それには社会に広く普及する初等教育から始めなければならないと考えていたが，現実には公教育そのものについての是非と宗教の問題と税金の拠出をめぐる異論により，1820年代になっても初等教育――全額であれ一部負担であれ税金による公教育――の制度は当時最も進んでいたマサチューセッツでさえなお揺藍期にあった。一方では1810年代からの産業の発展に伴う生活態度や慣習の変化や考え方の多様化に対する懸念の声が知識人の間で次第に高くなっていった。[24]

エヴァレットにとって政治における堕落とは，連邦の結合を解体する動き――地域間の経済的な対立であれ法的制度的な面での対立であれ――を意味し，それは父たちへの裏切りを意味した。一方共和国に繁栄をもたらす産業の進歩は有用知識の普及によって可能となるが，急速な進歩に伴う弊害には道徳による安全弁が必要であった。

> 私の話を聞いて下さっている皆様方すべてはよくご存じのことですが，階級としてヨーロッパの職工・労働者は著しく堕落していると考えられています。また農民は，殆ど例外なく，癒し難く愚かであると思われています。このような信念が社会にひじょうに広く蔓延したためにわが国の最も愛国的な市民の多くが，工場はその性質上悪徳と不道徳の学校であるという理由で，わが国への工場の導入に反対しました。今までのところ，この恐れは経験によって，幸せなことに，取り除かれてきました。そして工場は社会の他のどの部分にも劣らず，道徳上の理由によって，非難されることが少なくなっております。マサチューセッツでは，私たちの職工と農民は世界のどの職工と農民と比べても知性と道徳において劣ることはないでしょう。（*O*, 250－51）

アメリカの市民としての労働の倫理は，フランクリン的な勤勉と質素の美徳と節制，獲得された富は公共の福利に還元する共和主義の精神，そして社会の秩序を乱さない「健全で真面目な考え」（*P*, 324），を意味した。

その道徳の育成方法は，キリスト教的な道徳そのものを直接教育の現場で教えることではなく，「知性を向上させる手段を増加させて，すべての階層の人がそれを利用できるようにすること」によって，「啓発された道徳的公衆感情（an enlightened moral public sentiment）」（*O*, 250）を広めることである。そしてそれが，ジェファソンと違って，エヴァレットの場合――そしてホーレス・マンの場合も[25]――プロテスタントのキリスト教道徳を意味したのである。

エヴァレットの論法は，有用知識が技術と機械の進歩に役立つだけではなく，その知識自体のなかに道徳性が内在していると主張することにあった。1837年9月彼はマサチューセッツ慈

22. D・ウェブスターを議長とする「有用知識普及協会」というボストン・ライシーアムの設立に参加し（1828年），1831年5月それが「全国ライシーアム」に発展したとき副会長に就いた。Carl Bode, *The American Lyceum* (New York, 1956), 220.
23. Frederick Rudolfh, ed. *Essays on Education in the Early Republic* (Cambridge Mass., 1965), 1; 64 参照。
24. ユニテリアン＝ホイッグの論壇であった『北米評論』では産業・工業化を擁護する論陣がはられた。たとえばT・カーライルの「時代の兆候（Signs of the Times）」への反論「機械哲学の擁護」では「機械が知性を奴隷にするどころか，最も輝かしい意味において，それを解放してきた」と主張した。*NAR* (1831), 125.
25. ホレース・マン「宗教教育論」，『民衆教育論』（東京，1960），186ページ参照。

善職工協会でのスピーチで知性と道徳の関係について明快に説明した。

> 理性的存在としての人間は創造主によって二つの大切な特権を授けられています。一つは物理的力による物質と下等動物への支配権です。もう一つは同種の知性への支配権で，それは道徳の力であり，より低次元の形式においては物質への支配権によって生み出されることがしばしばあります。従って物質的世界を支配する力は，実際的に言って，社会，知性，道徳の世界における力のなかで最も重要な要素です。（中略）知性による物質の支配は原理的には，言葉の最も広義な意味における機械技術の媒介を通して行われます。（*P*, 281）

知性，すなわち有用知識の技術への応用による物質の支配によって「より低次元の形式」ではあるけれども，道徳の力が生まれると言ったのである。

彼は，先ず第1に技術の進歩の結果，自然の欲求を充たすための労働と時間の軽減によって余暇が生まれ，大衆が知的にも道徳的にも向上できる条件が作りだせる（*P*, 291）こと，第2に機械技術によって人間は「神の属性」を手にすることができる（*P*, 293）のだと言って，「時代の機械への傾向」に対する非難に対して反論した。

> 有用な技術を通して作用する知性は現代社会の最も重要な原理であります。魔法使いではなく，職工が現在では生活の親方（master of life）なのです。（*P*, 290）

彼は生活における機械技術の効用を説くだけでなく，更にそれ自体を神聖化した。

> 人がこの小さな機械（時計）のなかに正確に時の運行を計る魂を入れることができるとは何という奇蹟でしょうか。（*P*, 293）

彼は神が建設した「自然という寺院」のなかで技術をもった「知的な職工の聖職（ministry）」ほど「神聖な聖職」はないという（*P*, 298）。神――自然――人間の関係は，「アメリカの自由」――「寺院」（＝アメリカ）――「アメリカ人」（＝アメリカの職工）の関係に変換される。

こうしてエヴァレットは，「アメリカの自由」の下で機械技術がアメリカの自然に手を加えて，文明（繁栄）を前進させ，アメリカ人を幸福にする。この事実によってアメリカの世界的使命である自由の理念の神聖性が証明される，と考えた。道徳の問題はこのことを知ることに結局帰することになる。さしずめ知識人エヴァレットはその技術（雄弁術）を使って，アメリカのユニオンの祝祭全体を司る世俗的な祭司というわけである。[26]

道徳の基本にある宗教については，彼はユニテリアン派の元牧師としての宗教的党派性を極力抑えて――福音主義的信仰復興運動を個人的には敵視しながら[27]――ユニオン論者としての立場からキリスト教のすべての宗派を，一定の条件を付けて，取り込む立場をとった。「知識は自然宗教と啓示宗教の両方の忠実な同盟者である」（*O*, 583）という命題の解説として，前者は「啓発された理性」による自然の研究から導かれた「唯一の崇高な演繹」的結論であるとする一方，後者に対しては「科学という武器を宗教または道徳に向ける」人に対抗する「敬虔で学識ある人の瞑想と研究」によって守られてきたのだ，と言っている。

1838年マサチューセッツのタウントン郡での「郡コモン・スクール年次大会」で次のような「講話（discourse）」をした。

> 人間は宗教的存在であります。そして人間の手段と影響力が及ぶ範囲内で教育は理性的信仰の本来の基礎なのです。宗教が感情のみならず理性に訴えかけるのは，他の宗教とは区別されるキリスト教の特質なのです。それは聖書を調べることと，われわれ

26. 1850年代には祝祭やその他の組織――ロッジ，ライシーアム，職工学校，スポーツ・チーム，自警消防団など――が同化のためのネットワークとしての機能を果たさなくなっていった（Milton Cantor, 9）。
27. Henry F. May, *The Enlightenment in America* (New York, 1976), 352 参照。

のなかに存在する信仰にたいして理性を与える準備をすることを求めます。そして安息日には「講話」，すなわち証と義務と赦しに関する統一ある，論理の整ったスピーチを聞くようにとわれわれを招きます。この目標は，（人間としての立場から言うのですが，）教育なしに達成できるでしょうか。（中略）教育の利点がたとえ他の方面で無しとされても，人間が宗教的に永遠の存在であると考える時，人が暗闇のなかで自分自身と義務と目標に無知のまま成人するのを見ることは恐ろしいことです。（*P*, 346－47）

公教育における特定の宗派教育を禁止した州法（1827年制定）にも拘らず――実際「特定の宗派」への言及は避けているが――コモン・スクールの制度を充実し拡充するために，マサチューセッツの州知事として彼がキリスト教は教育の中心であると明言する必要があったのは，ニューイングランドの宗教的文化的状況からみて極めて自然であった。だからこそ1824年から1839年の間，ハーヴァード出身の元ユニテリアン派の牧師がマサチューセッツの政治家として，ジャクソン的民主主義にあからさまに反対する愚を犯さず，[28] 古典文学と歴史と科学の知識を素材に，ニューイングランドの政治的宗教的自由の伝統をアメリカの理念に組み入れる「物語」を創って，変動期の社会における不安な人々の愛国心と宗教心に訴えて，彼らの感情を一つにまとめることにある程度成功することができたのである。

XI　結び

以上，エヴァレットのアメリカ観は共和主義による人類の救済史観に基づいているのを見てきた。そしてこの選ばれた共和国が国内に様々の対立，相違，多様化を内包している1820－30年代の現実を前にして，聴衆にアメリカ人の出自は同一であると訴えて，共通の敵であるヨーロッパの専制主義と後進的な文明に対するアメリカの共和主義の優位性と文明の進歩性を説いた。そしてアメリカの歴史と経済的繁栄と民主制度の充実がアメリカが果たすべく期待されている世界史上の使命を証明するのであり，今まさにそれを完成する時が来ているのだと訴えた。

巡礼の始祖，ピューリタン，ワシントン，ジェファソン，アダムズなど自由の大義のために戦った戦士たちやハーヴァードをはじめ有名無名の公共の福利のために奉仕した人々にゆかりの場所で，彼らの業績を思い出して，彼らの遺志を正しく継承して彼らがやり遂げられなかったことを今の世代は実行しているかどうかを反省するように聴衆に促した。共通の父をもつすべてのアメリカ人は次に自分たちの子供にユニオンを守り，現在の繁栄と進歩をさらに前進させるように教えねばならない。教育はこのアメリカの理念を現実化するのに最も重要な役割を果たすのであると考えたのである。

彼は「ユニオン」を各州の自治を前提とする連邦国家の意味で使っただけでなく，その用語をあらゆる分野における分離と対立を超越するための理念として使った。それは東部と南部・西部，知識（人）と労働（者），資本と労働，科学と技術，自然と機械，知性と感情，精神と肉体，知識と道徳・宗教，神と人間の対立を回避する1820年代のヴィジョンである。それによって国内の社会的，文化的な分裂を避けるためにユニオンを強化する教育を勧め，対外的にはイギリスやフランスなどの文明国からの政治的文化的分離政策を支持し，アフリカやアジアの専制主義的，非キリスト教的非文明国に対してはアメリカ文明を教える使命を自負した。その文明は結局エヴァレット自身が体現している文化――古代ギリシャ・ローマの共和主義思想とアングロ・サクソンの宗教的政治的自由の精神を継承して，それを独立革命によって再生させたアメリカの国家理念としてのユニオン――のことであった。

従って，彼が「アメリカの家族」（*O*, 534）からワスプ（WASP）以外の白人とインディアンと黒人を，直接的な表現を使っていないが，

28. 保護関税，州権無効，インディアン問題をめぐるジャクソン一派との妥協を指す。Reid, 33-46 参照。

排除していることは彼と彼の聴衆が共有する，あるいは共有しようとする文化の特質を語っているように思える。[29] それは彼の現実理解の方法の弱さ――単純な対照論法（antithesis）――に最も端的に現れている。文明対野蛮，進歩対保守，キリスト教対異教，白人対有色人種，高度の技術対進歩の技術，文字文化対口承文化，アメリカ対ヨーロッパ，自由対専制，知識対迷信，秩序対アナキズム，単一の言語（英語）対多様な言語，具体と抽象，有用知識対装飾用の知識などの対照論に立って彼が話すとき，彼の「アメリカ」はいつも明確に前者の位置に属する。その際，彼のレトリックは彼と彼の共鳴者の出自――アングロ・サクソン＝プロテスタント＝ホイッグ＝ジェントルマン――を隠すのに充分な博学を示した。しかし1830年代以降の現実のアメリカ社会は対立と分離と多様化への傾向を強め，彼のレトリックによって修復できないほどその亀裂を広め，深めていった。

しかしアメリカの歴史を振り返って現実を見つめようとする祝祭の儀式は，それ自体のなかに矛盾があろうとも，アメリカの夢と現実が含んでいる矛盾そのものである。彼は彼が属する文化の良心と信条によるアメリカの統合を目指して，彼なりにその役目を果たして歴史から消えたのである。1863年11月19日エヴァレットは，ゲティスバーグでリンカーンとともに，ユニオンの大義の勝利についてスピーチを行った。現在彼の名前は殆ど忘れられているが，それは単にレトリックにおいて大統領より劣っていただけではない。[30]

29. 革命期の共和主義思想においては少数派の権利の弁護は全く考慮の外にあった（Gordon S. Wood, 62-6）。エヴァレットは1824年にはアングロ・サクソン系の単一民族（a homogeneous population,*O*, 30）による共和国を夢見ていたが，現実にはそれが不可能であると知っていた。黒人については彼らをアフリカに帰らせて，文明国を創らせるリベリア計画を支持し，政府は積極的に支援すべきだと「植民協会」で演説をした（*O*, 309－22）。インディアンについてはジャクソン大統領の強制移住政策を批判して，インディアンの「定住化と文明化とキリスト教化」こそが「真に善意ある政策」であると1831年２月14日にアメリカ議会で演説した（*R*, 117－28）。この演説でも彼の力点は，南部諸州による居留地の管轄権要求はユニオンを否定する暴挙であると弾劾するところに置かれた。

30. 二人のスピーチのレトリックの相違については，Andrew Delbanco, *The Puritan Ordeal* (Cambridge, Mass., 1989), 235-55 参照。